



# 愛隣幼稚園..... 園だより .....13. 夏休み号

## 私たちは戦争をしません

世界報道写真展を見に行きました。中学生が高校生の頃にも見に行った記憶があります。その頃から写真に興味があったようです。35年ぶりくらいのこの写真展、たくさんの作品の中に喜びや希望がありました。が、それ以上に多くの悲しみや苦悩、そして絶望が写し出されていました。中学生の頃にもこの写真展の壁には、戦火の中にあるたくさんの人を撮った写真が掛けられていました。直視するのが苦しくなったことを覚えています。30年以上の時が過ぎていますが、同じ写真展の壁には、あの時と同じように戦火の中で苦悩し、悲しみにくれる人々の姿がありました。私たち人類は、学ばないのでしょうか。人が人の命を奪うことの無意味なことを。この苦しみや悲しみのない穏やかな生活を望まないのでしょうか。少なくともここに映し出されている人々は、この争いの無意味なことを知っています。今日にでもこの紛争が解決して、争いや悲しみのない穏やかな毎日が永遠に続くことを切望しているはずです。にもかかわらず、今日も世界のどこかで人が人の命を奪い、血が流れ、悲しみにくれる人々がいるのです。この写真展から戦争の写真が無くなる日はやってくるのでしょうか。

昨年の夏、この園だよりに福島の記事を書きました。誰も住むことのできなくなってしまった被災地の現実には私たちにリアリティがなく、たった1年という時間の経過の中で既に忘れられていると書きました。どんなに悲しい現実がそこにあっても、私の生活がなければ鈍感になることができます。忘れることなど容易なことです。だから更に1年が経過した今は、あの時もういらなかつたものをもう一度動かそうとさえ考え始め、その方向へ進んでいるように思います。あの日、私たちは心に強く感じていたはずでした。たった一つの原因事故がこんなにも私たちの穏やかな日々を脅かし、子どもたちの未来を不安に変えることを。それなのに私たちは、すっかり忘れてしまいました。

たった2年前のことですらこの有様ですから、68年も前にこの国が戦火の中にあったことなんて、その時生まれてもいなかった私たちには、まるで他人事です。戦争の現実にはフィルターを向こうですらぼやけていて、痛みも悲しみもありません。しかし、今はないことですが、ひとつ誤れば簡単にこのフィルターは外され、苦悩と悲しみと絶望は現実のものになるのです。それはわざわざ写真展に足を運ばずとも、今日もどこかで起こっている紛争を伝えるテレビのニュースが教えてくれます。

敗戦の年、日本人男性の平均寿命は23.9歳。生きる希望すらない時でした。翌年、日本国憲法が公布されます。その時のことを当時12歳だった井上ひさし氏は『子どもにつたえる日本国憲法』（講談社刊）の中にこう書いています。<・・・とりわけ、日本はもう二度と戦争で自分の言い分を通すことをしないという覚悟に、体がふるえてきました。・・・これは途方もない生き方ではないか。勇気のいる生き方ではないか。・・・なんて誇らしくていい気分だろう。>原子爆弾の投下で終りを告げた第二次世界大戦。皆が二度とこんなおそろしく、悲しい思いをしたくない。もう二度と戦争はやるまい。と強く思っていた時に、この国の憲法が「私たちは戦争をしない」と宣言したのです。それは10代の少年にとってどれほどの喜びであったことでしょうか。そしてそれは『誇らしい気分』を彼にもたらすものでした。世界中の人々が希求し続けていながら、未だ戦争のない世界は実現されていません。だから「戦争をしない」と宣言している私たちがまた道を誤ることはできません。同じ著書の中で憲法の前文を子どもにもわかりやすいようにと彼は次のような言葉で書き直しています。以下はその一部です。<私たちが、同じ願いをもつ世界のほかの国の人たちと、心をつくして話し合い、そして力を合わせるなら、かならず戦<sup>いくさ</sup>はいらなくなる。私たちはそのようにかたく覚悟をきめたのだ> 世界中の子どもたちの未来のために、私たちもかたく覚悟をきめ子どもたちに言い続けます。“愛隣幼稚園は戦争が嫌いです”と。